厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

国連国際障害者統計ワシントン・グループの指標の尺度特性に関する研究

研究分担者　齋藤　崇志　国立障害者リハビリテーションセンター研究所　研究員
研究協力者　今橋久美子　国立障害者リハビリテーションセンター研究所　室長
研究代表者　八巻知香子　国立がん研究センター がん対策研究所 がん情報提供部　部長

研究要旨

国連国際障害者統計ワシントン・グループの指標（WG指標）は、障害者人口と障害の有無による格差を国際的に把握することを目的とした障害（者）に関する新しい指標である。本研究では、WG指標の尺度特性として、①WG指標を使用した場合の欠損値の出現状況とその関連要因、②身体障害者手帳の所持者におけるWG指標の判定結果の特徴を分析した。分析①と分析②のいずれにおいても、令和4年生活のしづらさなどに関する調査（しづらさ調査）の二次データが分析に用いられた。分析①では、しづらさ調査の二次データ（n=12,822）が分析対象となった。そして、障害者手帳の所持とWG指標における欠損値の出現の間の関連性が二項ロジスティクス回帰分析を用いて分析された。分析②では、身体障害者手帳（視覚、聴覚、肢体不自由（下肢））所持者のデータに着目し、身体障害の重症度別にWG指標で「障害なし」と判定される者の割合を算出した。分析①の結果、障害者手帳の所持は、欠損値によりWG指標で障害の有無が定義できないことと有意に関連していた（調整済オッズ比：1.198-2.931）。分析②の結果、軽症な身体障害を持つ身体障害者手帳所持者は、重症な身体障害を持つ所持者と比較して、WG指標で「障害がある」と判定される割合が低値を示した。以上の結果から、WG指標を利活用する際は、欠損値に起因するデータの偏り、ならびに、本邦独自の障害指標との互換性について留意する必要があると考えた。

A．研究目的

国連国際障害者統計ワシントン・グループの指標（WG指標）は、障害者人口と障害の有無による格差を国際的に把握することを目的とした障害（者）に関する新しい指標である。2022年、日本で実施される公的調査にWG指標が初めて導入された。WG指標に基づく障害統計の利活用を推進するにあたり、WG指標の使用上の留意点や日本の既存の障害指標と対比した特徴、つまり、尺度特性について理解を深めることが肝要である。

本研究では、WG指標の尺度特性として、①WG指標を使用した場合の欠損値の出現状況とその関連要因、②身体障害者手帳の所持者におけるWG指標の判定結果の特徴を分析した。

B．研究方法

分析①と分析②のいずれにおいても、令和4年生活のしづらさなどに関する調査（しづらさ調査）の二次データが分析に用いられた。

分析①：

しづらさ調査の二次データ（n=12,822）が分析対象となった。WG指標の6質問に対する欠損値の出現割合を算出した。そして、障害者手帳の所持とWG指標における欠損値の出現の間の関連性を二項ロジスティクス回帰分析を用いて分析した。

分析②：

しづらさ調査の二次データの中から、身体障害者手帳（視覚、聴覚、肢体不自由（下肢））所持者のデータが抽出され分析に用いられた。全ての分析は、身体障害者手帳（視覚）（V群）、身体障害者手帳（聴覚）（H群）、身体障害者手帳（肢体不自由（下肢））（L群）の3群ごとに実施された。そして、身体障害の重症度別にWG指標で「障害なし」と判定される者の割合を算出した。

（倫理面への配慮）

倫理面への配慮として、本研究は、国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会の承認を得た後に実施された（承認番号：2024-069）。

C．研究結果

分析①：

WG指標の各質問における欠損値の出現割合は、9.71-24.2%であった。WG指標の各質問への欠損値によって障害の有無が判定できなかった者が、16.9%で認められた。交絡要因を調整した結果、障害者手帳の所持は、欠損値によりWG指標で障害の有無が判定できないことと有意に関連していた（調整済オッズ比：1.198-2.931）

分析②：

分析対象者数は、V群がn=189、H群がn=240、L群がn=634であった。WG指標で「障害なし」と判定されたV群の割合は、身体障害の重症度が軽症な者（n=36）において16.7%、重症な者（n=153）において5.9%であった。同様に、H群では、身体障害の重症度が軽症な者（n=146）において39.0%、重症な者（n=94）において20.2%、L群では、身体障害の重症度が軽症な者（n=430）において54.0%、重症な者（n=204）において28.9%であった。

D．考察

分析①：

分析の結果、WG指標に多くの欠損値が生じていた。そして、欠損値が生じた者を障害統計から除外して集計した場合、障害者手帳を所持している者が系統的に少なく見積もられる可能性が示唆された。具体的には、障害者人口を最大20%程度少なく見積もる可能性が示唆された。

分析②：

軽症な身体障害を持つ身体障害者手帳所持者は、重症な身体障害を持つ所持者と比較して、WG指標で「障害がある」と捕捉されにくいことが示唆された。このことは、WG指標に基づく障害統計が、軽症な身体障害者手帳所持者を反映しにくいという特徴を有していることを示唆していると考えた。

E．結論

WG指標を利活用する際は、欠損値に起因するデータの偏り、ならびに、本邦独自の障害指標との互換性について留意する必要がある。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

１．論文発表

Saito T, Imahashi K. Impact of Missing Values in the Self-Administered Washington Group Short Set: A Cross-Sectional Study Using Secondary Data of a National Survey of Persons With Disabilities in Japan. Cureus. 2025 Jul 6;17(7):e87388. doi: 10.7759/cureus.87388.

Saito T, Imahashi K. Characteristics of the Washington Group Short Set in Assessing Functional Difficulty Among People With Physical Disability Certificates of Vision, Hearing, and Lower-Limb Impairments in Japan. Cureus. 2025 Nov 16;17(11):e96999. doi: 10.7759/cureus.96999.

Saito T, Imahashi K. The Washington Group Short Set of Functioning as a Global Disability Data Collection Tool: A Discussion on Its

Comparability With a Local Disability Index From Japan. Cureus. 2026 Jan 25;18(1):e102282. doi: 10.7759/cureus.102282.

２．学会発表

Saito T, Imahashi K. Disabilities defined by the Washington Group Short Set and educational attainment among Japanese adults. Secondary analysis of a representative survey. World Physiotherapy Congress 2025. May 29, 2025, Japan.

H.知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし